



BNC高頻出5・4・3品詞多義語の多義構造の記述

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮畑, 一範 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002703

BNC高頻出5・4・3品詞多義語の多義構造の記述

宮 畑 一 範

<kazm@lc.osakafu-u.ac.jp>

0. はじめに

本稿は、1億語超えコーパス BNC において800回以上の使用が観察される品詞 (POS のタグづけされたクラス)¹別の6318単語 (Kilgarriff (1995)) に3品詞以上収録されている44項目に関して、宮畑 (2015) で提案した多品詞語の多義構造の記述の枠組みに従って、記述を試みると同時にこの記述法の妥当性の検証も行う。取り扱う対象語と BNC における各語の品詞 (タグ) の頻度順位は以下の通り。

5 品詞 : like	prep 91位 ; adv 2214位 ; a 2329位 ; conj 3775位 ; n 5020位 ²
round	adv 725位 ; prep 951位 ; a 2116位 ; n 2343位 ; v 4049位
4 品詞 : back	adv 118位 ; n 415位 ; v 2048位 ; a 3160位
outside	prep 901位 ; adv 1799位 ; a 2346位 ; n 3773位
past	n 1120位 ; a 1158位 ; prep 1494位 ; adv 3333位
right	adv 231位 ; n 297位 ; a 299位 ; intj 2968位
3 品詞 : above	prep 786位 ; adv 942位 ; a 3341位

¹ この「品詞」(POS タグ) には、名詞、動詞、形容詞などの標準的なもの以外に、to に付された infinitive marker も含まれる。頻度に関しては、あくまでも同一語形の同一品詞 (POS タグ) に基づくので、同形異義語の混在は避けられない。

² この名詞のランキングには personal likes and dislikes のような「好きなもの」の例も含まれる。

as	conj 31位 ; prep 48位 ; adv 98位
before	prep 185位 ; conj 314位 ; adv 1522位
calm	a 4452位 ; v 4723位 ; n 5667位
close	v 664位 ; a 774位 ; adv 1277位
dear	a 2165位 ; intj 2766位 ; n 3140位
direct	a 1044位 ; v 1763位 ; adv 5641位
double	a 1762位 ; v 3104位 ; n 3966位
fair	a 1393位 ; adv 4113位 ; n 5184位 ³
fit	v 1080位 ; a 3085位 ; n 3472位 ⁴
for	prep 11位 ; conj 1326位 ; adv 2443位 ⁵
half	det 460位 ; n 1453位 ; adv 4797位
head	n 241位 ; v 1537位 ; a 4138位
inside	prep 1376位 ; adv 1962位 ; n 3083位
level	n 268位 ; a 2458位 ; v 5855位
light	n 553位 ; a 1189位 ⁶ ; v 2060位
little	a 370位 ; det 378位 ; adv 1020位
near	prep 724位 ; a 2480位 ; adv 2633位
need	v 147位 ; n 280位 ; modal 2497位
no	det 74位 ; intj 128位 ; adv 368位
ok(ay)	adv 934位(okay) ; intj 3961位(ok) ; a 4508位(okay)
open	v 392位 ; a 587位 ; adv 2807位

³ 多義として考えられる名詞義の fair は現代ではほとんど用いられず、頻度として順位を上げているのは a book fair のような「イベント」の意の fair。

⁴ 名詞の順位には、have a fit のような「発作」の意の fit も混在。

⁵ BNC には副詞での収録は見られないので、Kilgarrieff (1995) の誤集計だと思われる。除外すると「2品詞」だが、前置詞の頻度が11位の主要語であるので、本稿で記述する対象として取り上げる。

⁶ 多義としては、「光」系の語義を記述対象とするが、順位には make light of のような「軽い」系も混在。

opposite	a 2289位 ; adv 5536位 ⁷ ; n 5550位
other	a 75位 ; n 264位 ; pron 685位
over	prep 123位 ; adv 142位 ; n 4273位 ⁸
overall	a 1865位 ; n 4177位 ; adv 4244位
short	a 588位 ; adv 2309位 ; n 6256位
since	conj 291位 ; prep 660位 ; adv 3178位
square	n 2570位 ; a 2915位 ; v 5617位
subject	n 336位 ; a 3627位 ; v 4468位
that	conj 13位 ; det 27位 ; adv 2022位
to	infinitive marker 7位 ; prep 10位 ; adv 739位
top	n 628位 ; a 973位 ; v 4235位
total	a 905位 ; n 1503位 ; v 5591位
waste	n 2043位 ; v 2668位 ; a 4070位
welcome	v 1691位 ; a 3045位 ; n 4309位
well	adv 82位 ; intj 583位 ; a 3247位
wrong	a 723位 ; n 5544位 ; adv 5771位

なお, like, round, as, before, close, head は宮畑 (2015), need は宮畑 (2016) で提示したものに必要に応じた修正を加えた上での再掲である。

1. BNC高頻出5品詞多義語(2語)の多義構造

1.1. like

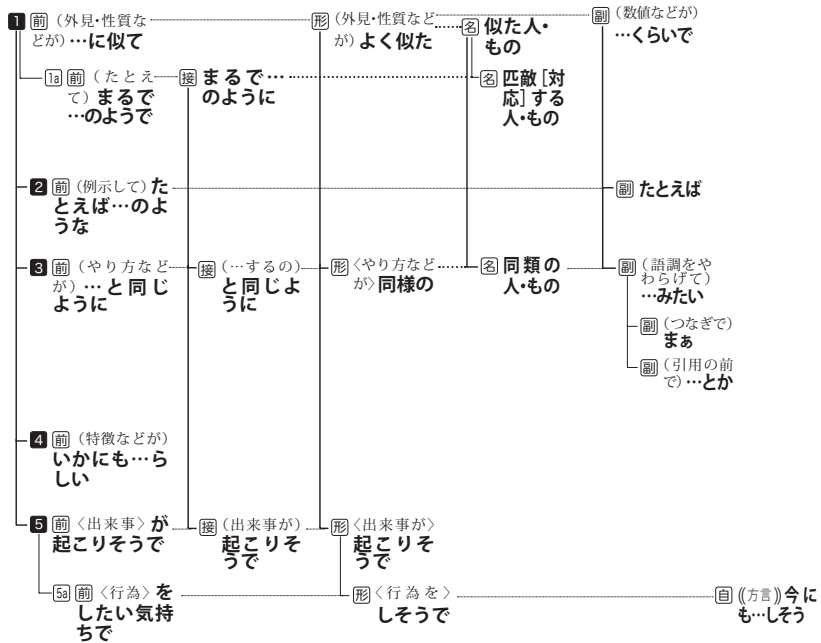
like の多義は, 前置詞の語義展開を軸に, 接続詞, 形容詞, 名詞,

⁷ BNC で AV0 (副詞) のタグづけされた例が661に対して, PRP (前置詞) は1096例収録されている (数は本稿執筆時 (以下同様))。コーパスデータの変更により用例数の変動はありうるにせよ, 前置詞の opposite は少なくとも順位に含まれているべきである。

⁸ 大半はクリケットの「投球単位」の例だが, people aged 60 and over のような副詞として認定すべきものも名詞に混入している。

副詞に広がりを見せる⁹。中心義（語義**1**）は近似の意味合い。ここから、例示（語義**2**），同類（語義**3**），典型（語義**4**），（時間的）近接（語義**5**）に展開する。接続詞義は，語義**1**から拡張した類似（語義**1a**）の意味合いのほか，同類（**3**系）と近接（**5**系）の意味を引き継ぐ。形容詞義は，近似（**1**系），同類（**3**系），近接（**5**系）の意味を引き継ぐ。名詞義は，近似・類似（**1**・**1a**系）と同類（**3**系）の特性をもつものの意。副詞義は，近似（**1**系），例示（**2**系），同類（**3**系）に対応する。基本的に，第2以降の品詞の語義は，筆頭品詞である前置詞義の一部を引き継ぐが，全体として見れば，核となる語義は異なる品詞をまたいでも一定している部分が多い。

like

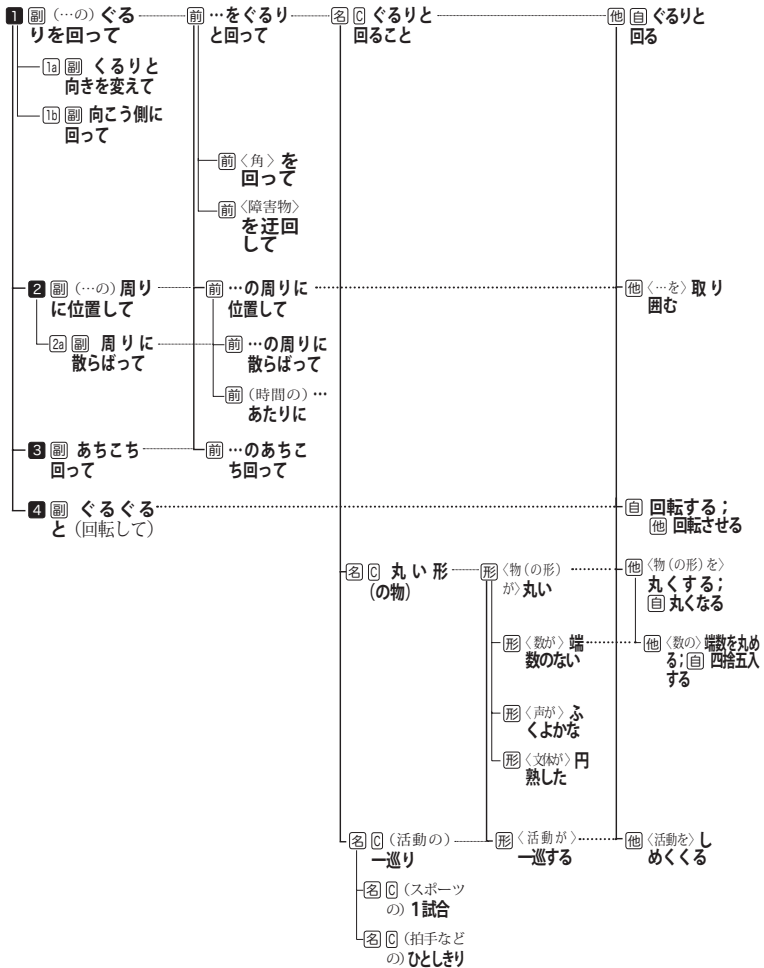


⁹ 多義構造の記述には，意味のつながりの観点から自動詞義をひとつ含めているが，非標準的な方言でもあり，使用頻度は低い。

1.2. round

round は、副詞義が語義展開の軸で、前置詞義はほぼ副詞義に対応する。動きを表す「ぐるりを[と]回って」(1系)を要に、配置の意味合い「周りに位置して」(2系)と方々を移動する「あちこち回って」(3系)に拡張する。副詞義はさらにひと回りを繰り返す「ぐるぐると」(語義4)にも広がる。名詞義と形容詞義はかなり偏りおよび独自の展開を見せる。名詞義は、副詞・前置詞義の「ぐるりを[と]回って」(1系)と対応する「ぐるりと回ること」から、その動きの軌跡の形状にあたる「丸い形(の物)」と、活動が始まって終わるまでの「一巡り」に広がる。形容詞義は、名詞義から「丸い」という特性の意味を引き継いで、ここから、端数のないこと、声や文体の特徴をそれぞれ「丸い」と見立てた意味合いと、活動が「一巡する」に展開する。ほとんどが他・自の両語義をもつ動詞義は、筆頭の副詞義の中核をなす3つの語義(語義1, 2, 4)に対応・関連するもののほか、名詞・形容詞義の「丸い(形)」「一巡り(する)」を生み出すプロセス義に拡張する。異なる品詞で独自に見られる語義に対応する語義同士でも関連性を保った構造をなすのは、いずれの品詞内の語義拡張も特性類似の関係によるからである。

round



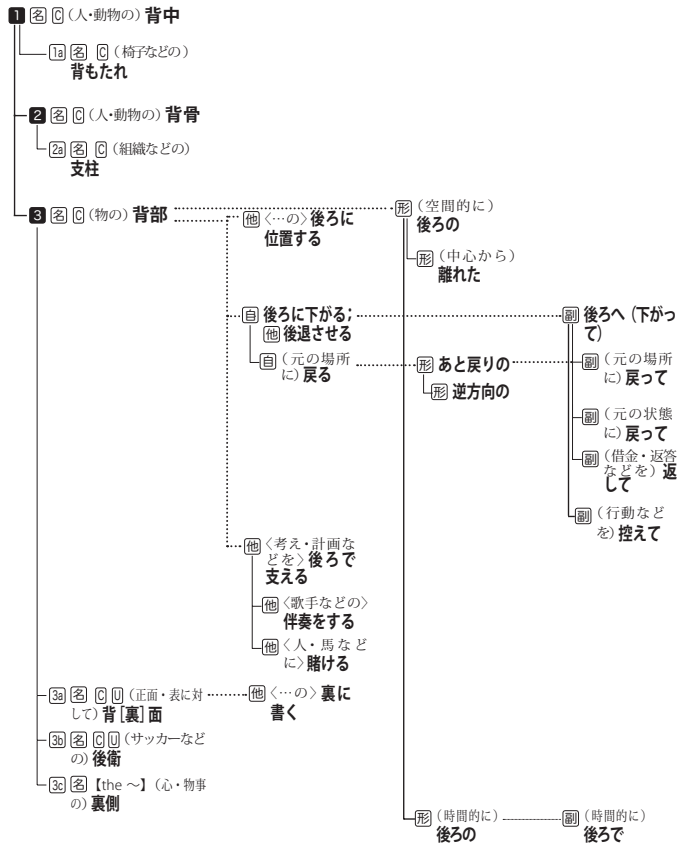
2. BNC高頻出4品詞多義語(4語)の多義構造

2.1. back

多義の要は、名詞義「背中」(語義**1**)。ここから、その一部分である「背骨」(語義**2**)と、物の「背中」にあたる「背部」(語義**3**)

に広がる。他の品詞の語義は、局所的な展開で関連する。形容詞義は、「背部」がもつ特性に転じた「後ろの」（さらに、空間から時間の「後ろの」に展開）と、動詞義の「戻る」に含まれる方向性「あと戻りの」に拡張する。動詞義は、後ろの位置と関連して、「後ろの位置に存在する」（後ろに位置する）と「後ろの位置に移動する」（後ろに下がる），そして（語義としては定着していない具象義を認知的には經由して）抽象義「後ろで支える」に広がる。副詞義は、動詞義「後ろに下がる」の様態にあたる「後ろへ(下がって)」を節点にさらに拡張するほか、形容詞義「(時間的に)後ろの」に対応する意味ももつ。

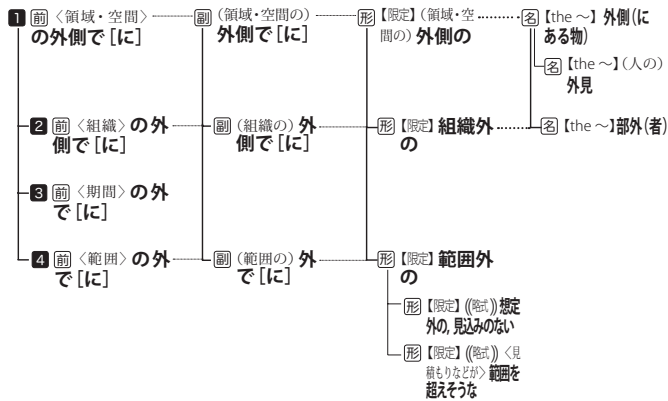
back



2.2. outside

outside は、前置詞義を軸に、空間、組織、範囲「の外で」の意味（それぞれ語義 **1** **2** **4**）を副詞義、形容詞義ともに引き継ぐ。名詞義は、形容詞義の空間と組織の「外の」という特性をそれぞれもつものという意味を担う。時間の意味（語義 **3**）は前置詞にのみ見られる。

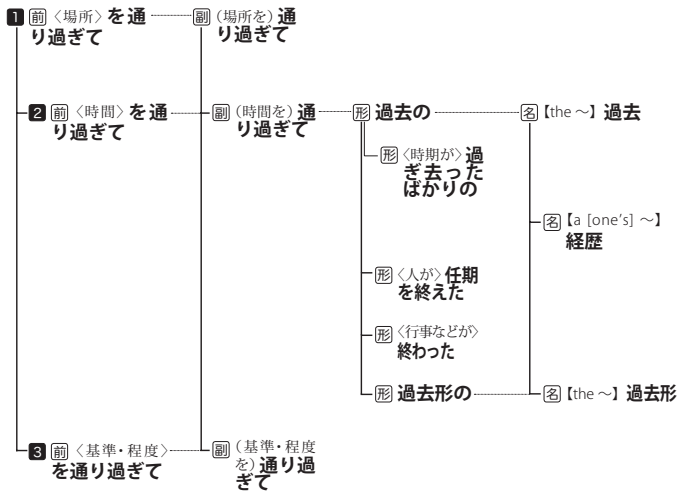
outside



2.3. past

past は、前置詞義を柱に、空間、時間、限度の「通り過ぎて」の意味（それぞれ語義 **1** **2** **3**）をそのまま引き継ぐ形で副詞義が展開する。形容詞義・名詞義は、時間の意味合い（**2** 系）を節点に広がりを見せる。

past

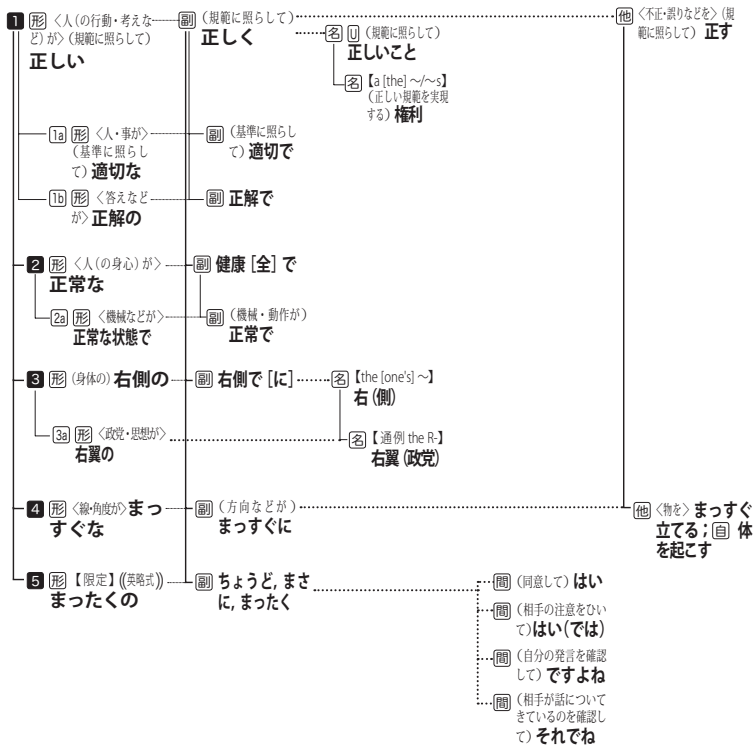


2.4. right

right の多義構造の要は、形容詞義「正しい」。規範に合致するという意味である。ここから展開する語義は、ほとんどすべて副詞義に引き継がれる。名詞義は、「(規範に照らして)正しい」という特性をもつこととそれを実現するための「権利」の意味に展開するほか、「右側の」「右翼の」ものという意味を担う。間投詞は、意図した「まさに」その瞬間に同意、注意喚起、確認を実行する機能をもつ。動詞義は、「(規範に照らして)正しい」と「まっすぐな」状態をそれぞれ生み出すプロセス義「正す」「まっすぐ立てる」を意味する¹⁰。

¹⁰ BNC で動詞のタグづけされた right の収録例は154のみ。

right



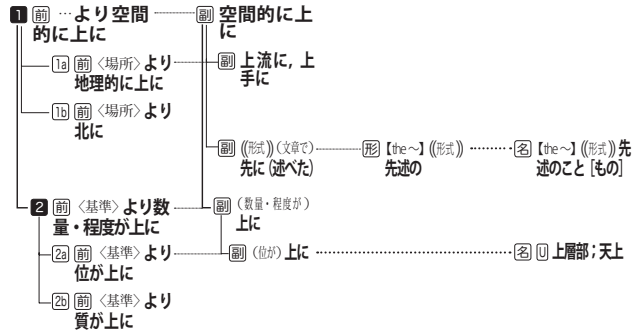
3. BNC高頻出3品詞多義語(38語)の多義構造

3.1. above

多義構造の柱は前置詞義で、空間的位置として「上に」(語義**1**)と、その見立てにあたるなんらかの基準よりも「上に」(語義**2**)が展開の中核をなす。副詞義は、前置詞義の大半を引き継ぐ。形容詞義・名詞義¹¹は、特定の副詞義と対応・関連するのみである。

¹¹ BNC では、The above is an edited version of a paper ... のような above は名詞ではなく AJ0 (形容詞・原級) がタグづけされている。

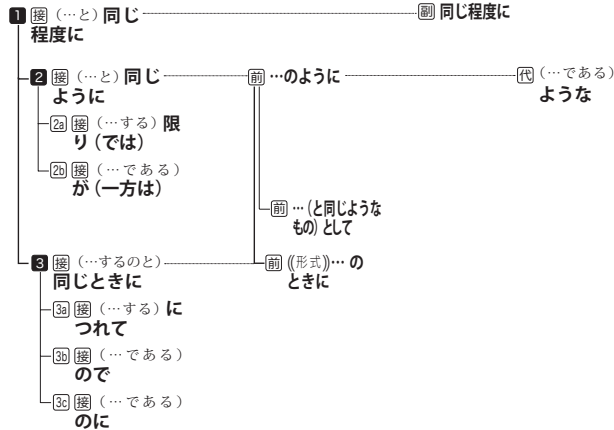
above



3.2. as

as は、接続詞が最も豊かに語義展開を見せる。同程度 (1 系) の意味を要に、同類 (2 系), 同時 (3 系) に展開する。前置詞義は、このうち同類と同時の意味合いを引き継ぐ。副詞義は同程度, 代名詞¹²は同類のみが対応する。

as

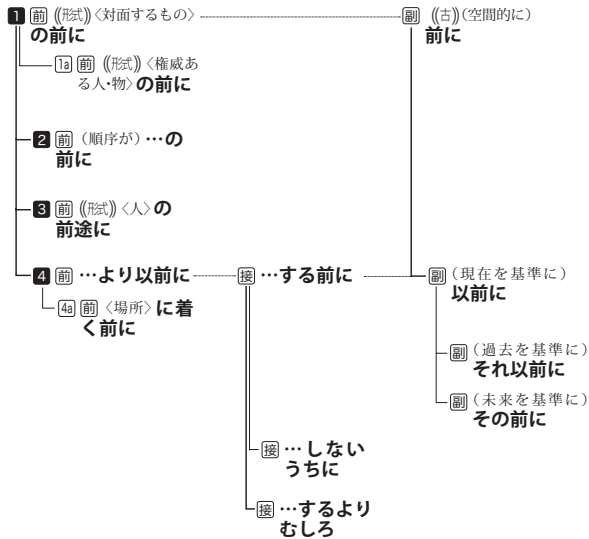


¹² BNC では代名詞認定の as はなく、たとえば the same materials as will be used や as is often the case の as は CJS (従属接続詞) がタグづけされている。

3.3. before

before の要となる語義は，単なる空間的な位置関係ではない。鏡やカメラ，聴衆などの視線が感じられるもの「の前に」の意¹³。筆頭品詞の前置詞義は，ここから，順序（語義 ②），前途（語義 ③），時間（語義 ④）の意味に展開する。接続詞義は，時間の意味を引き継いで展開する。副詞義では，空間の意味合いは古い用法としてはあるものの，現在・過去・未来をそれぞれ基準にした時間的な「前に」の意味が主である。

before

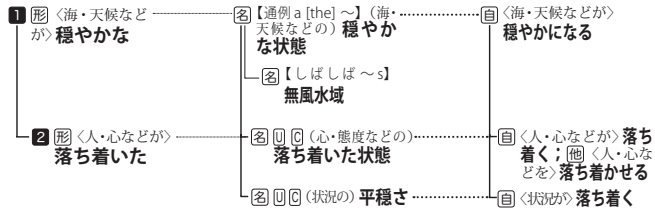


¹³ 単なる位置関係は，meet in front of the library のように in front of. before は，have a discussion before the audience (公開討論を行う) のように，聴衆が見ている前で向き合う形であることを意味する。

3.4. calm

形容詞義の自然の状態が「穏やかな」（語義 ①）とその見立てにあたる人（の心）が「落ち着いた」（語義 ②）を柱に、名詞義はそれぞれその状態、動詞義はそれぞれその状態になるプロセスの意味に展開する。名詞義・動詞義は、さらに「平穏な状況(になる)」にも広がる。全体的に多義構造は品詞間で平行する。

calm

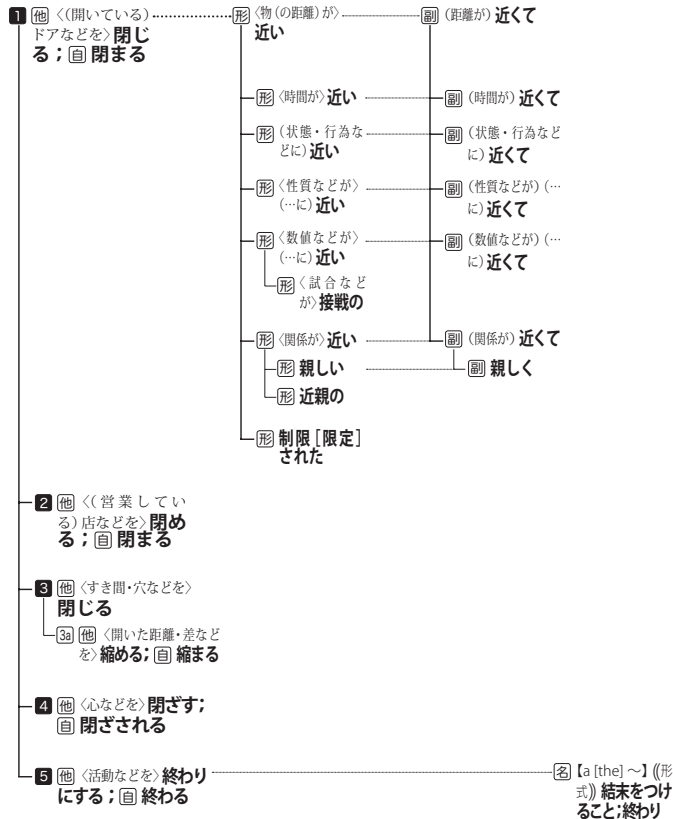


3.5. close

close は、形容詞・副詞の語義間で極めて密な対応関係を保ち、距離の意から、特性面の類似関係に基づいて、時間、状態・行為、性質、数値、関係とはほぼ並行的に展開するが、筆頭品詞の動詞義との接点は、中心義（語義 ①）であるプロセス「閉じる」に対して結果(状態)にあたる物理的な距離が「近い」という語義だけである。動詞義は動詞義で、機能面の類似関係に基づいて独自の展開を見せる（語義 ② ~ ⑤）。名詞義は、語義自体が限定的で、動詞義 ⑤ と対応関係にある¹⁴。

¹⁴ NNI（普通名詞・単数形）がタグづけされた close（たとえば at the close of ... や come to a close など）は330例収録されている。

close



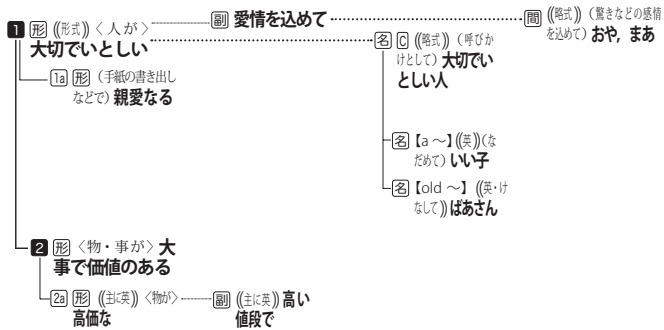
3.6. dear

dear は、形容詞義を柱に多義構造をなすが、他品詞の語義はいずれも局所的に対応・関連するのみである。副詞義¹⁵の「大切に」としい」気持ちを込めた状態で（愛情を込めて）と「高価な」状態で（高

¹⁵ BNC で AV0 (副詞) がタグづけされている dear の例は11収録されているが、半数は誤認定と思われる。また、cost dear の dear が NN1 (普通名詞・単数形)、cost dearer の dear(er) が AJC (形容詞・比較級) とタグづけされる不備も見受けられる。

い値段で)は互いに認知的関連性はない。名詞義も「大切にいたい」とい特性をもつ人から、限定的に「いい子」、限定かつ皮肉を込めて「ばあさん」に展開する。間投詞は、愛情から一般的な強い感情に広がった気持ちの表明として機能する。

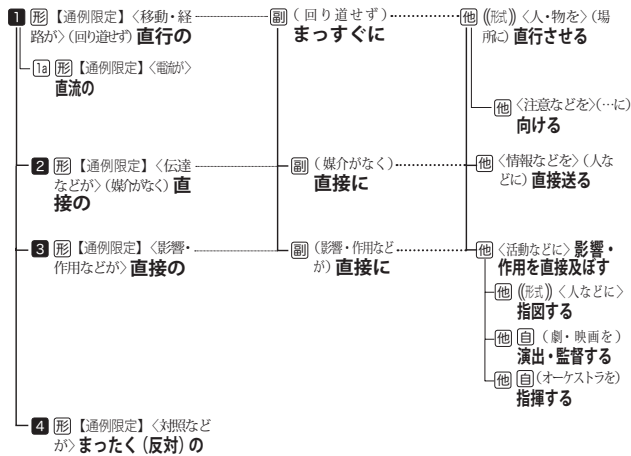
dear



3.7. direct

多義構造の主要な骨格は、筆頭品詞である形容詞義，第2・第3品詞の副詞義・動詞義ともに共通する。形容詞義の経路，伝達，影響・作用の意味合い（それぞれ語義 **1** **2** **3**）は，副詞義にそのまま引き継がれる。他動詞義も，「直行させる」「直接送る」「影響・作用を直接及ぼす」ときれいに平行する。影響・作用の動詞義は，さらにいくつかの特定種に意味が限定される。

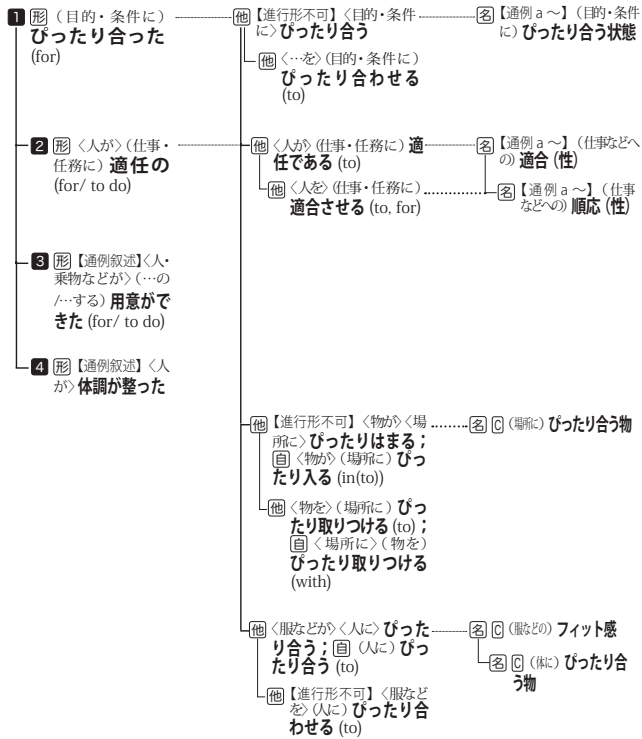
direct



3.8. double

多義構造の柱は、形容詞義の「2倍の」、「2つ重なった」(二重の)、「二重に解釈できる」。「2つ重なった」はさらに「2つ対をなした」に広がる。副詞義は、このうち「2倍の」「2つ重なった」「2つ対をなした」を引き継ぐ。名詞義は、「2倍」とその特性をもつものに展開するほか、「2つ重なった物」(二重の物)にも広がる。「2倍のもの」と「2つ重なった物」は特性類似の関係にあるが、多義構造全体の中での位置づけで言えば、それぞれの形容詞・副詞義との関連性の方が密だと見なしうる。さらに、「二重に解釈できる」ものとして、「二重スパイ」「一人二役の俳優」の意も担う。動詞義は、ほとんどが局所的な展開として認知的に関連づけられる。

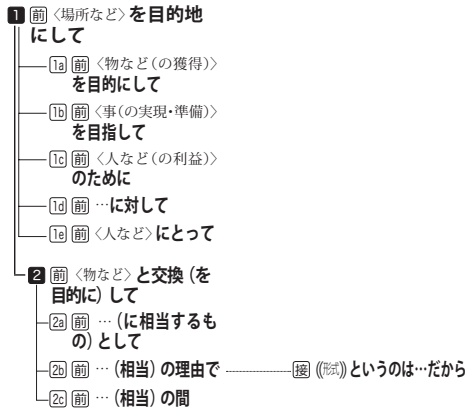
fit



3.11. for

for の多義構造は、ほぼ前置詞義で完結する。目的と交換の意味を核に、それぞれ多様な語義に拡張する。前者は、目的地を目指す見立てとして展開する。後者は、等価交換の対応関係を基に意味が広がる。接続詞義は、このうちのひとつ (理由) のみと接点をもつ。

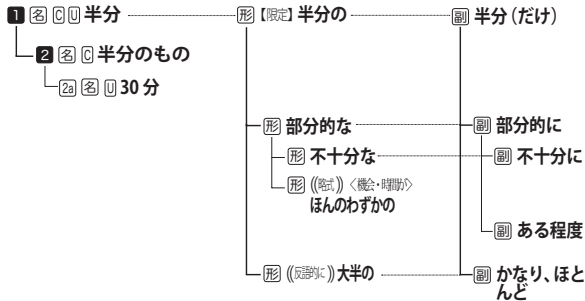
for



3.12. half

half の多義構造の要は、名詞義の「半分」。形容詞義も副詞義も、その特性を引き継ぐ。「半分の」から、「部分的な」と、反語的に「半分も」の意味合いで「大半の」に広がる。この大枠の展開は、副詞義もそれぞれ平行する。

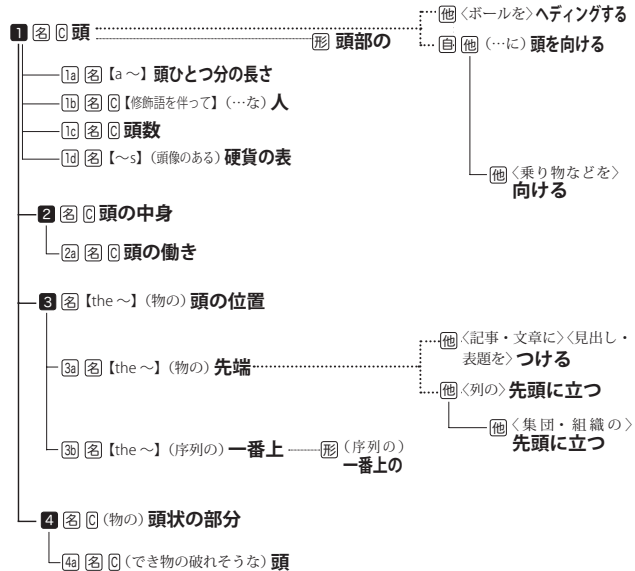
half



3.13. head

head の多義構造は名詞義が柱で、もっとも豊かに展開する。形容詞義・動詞義は、筆頭品詞の特定の語義との対応・関連が強固で、品詞内での語義同士の認知的関連性は乏しい。形容詞義「頭部の」「(序列の)一番上の」は、それぞれ名詞義 ①, ③b) と対応する。主要な動詞義はいずれも名詞義の特定の語義と認知的な関係にある。「ヘディングする」は「頭」を道具として使ってボールを打つプロセスを表す。「頭を向ける」は「頭」を対象としたプロセスである。見出しなどを「つける」は、記事などの「先端」(という場所)に見出しなどを置くプロセスを意味する。列の「先端に立つ」も同様に、列の「先端」(という場所)に立つというプロセスの意味である。

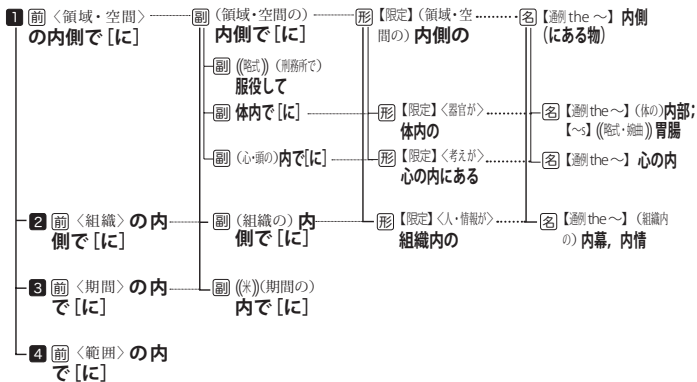
head



3.14. inside

多義構造の軸となるのは、前置詞義。空間、組織、期間、範囲「の内で」の意味（それぞれ語義 **1** **2** **3** **4**）は、きれいに outside と対義をなす（→2.2）。第2品詞以降の語義展開を見比べると、相違が観察されておもしろい。outside で豊かに展開した範囲（**4**系）の意味は、inside では前置詞のみにとどまる。副詞義では、空間（**1**系）、組織（**2**系）、期間（**3**系）の意味を引き継ぐほか、空間の「内で」は特定種として「刑務所の中で」「体内で」と、見立てにより「(心・頭の)内で」に拡張する。形容詞義は、空間（**1**系）、組織（**2**系）の意味合いをほぼ引き継ぐ。名詞義は、いずれもその特性をもつものの意を担う。

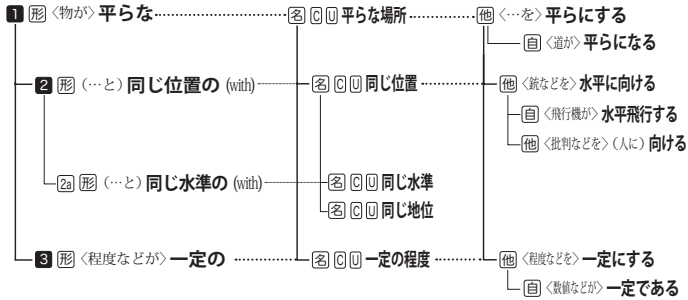
inside



3.15. level

level は、形容詞義、名詞義、動詞義で、平面（**1**系）、同位置（**2**系）、同程度（**3**系）とほぼ語義展開が平行する。基本的に、名詞義は形容詞義の特性をもつもの、動詞義は形容詞義の特性の状態にするというプロセスを表す。

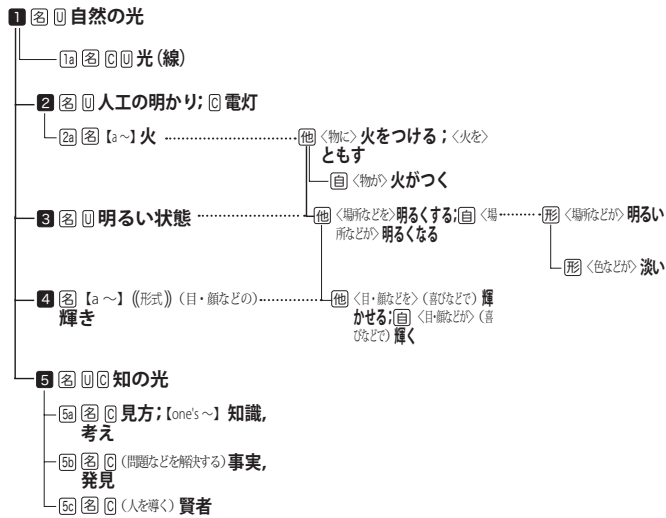
level



3.16. light

light は、「自然の光」を出発点に、見立てに基づいて多義構造の軸となる名詞義で豊かに展開を見せる。動詞義は、「火」に対してそれを生じさせるプロセスである「火をつける」、 「明るい状態」に対してその状態にするプロセスを表す「明るくする」、目・顔などの「輝き」に対してそれを生み出す「輝かせる」に広がる。名詞義同士の関連性とは異なるが、いずれも特性における類似性をもつため、動詞義内で認知的な関連性を認めることができる。形容詞義は、さらに局所的なつながりしかなく、「明るくする」結果の状態である「明るい」を節点に、色などが「淡い」に展開するのみである。

light



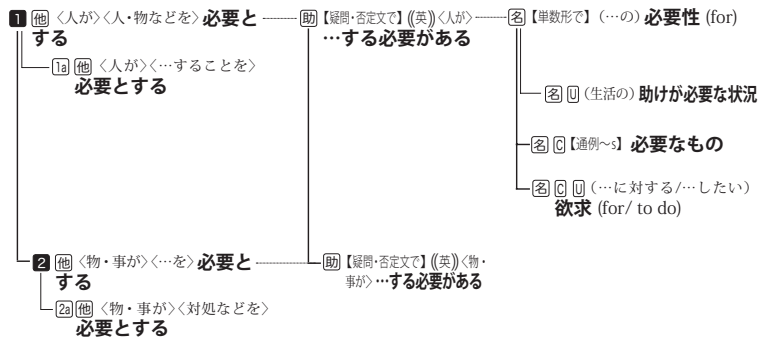
3.17. little

物理的なサイズが「小さい」を要に，量（**2**系）と規模・程度（**3**系）の意味合いに広がる。さらに、「小さい」ことを肯定的にとらえた「小さくていとおしい」と否定的にとらえた「ちっぽけな」に展開する。名詞義は，これらの特性そのものか，その特性をもつものの意を担う。副詞義は，規模・程度（**3**系）の意味合いを引き継ぐにとどまる。

3.19. need

動詞義と助動詞義は密な対応関係にある。人が「必要とする」をベースに、見立てにより、物・事が「必要とする」に意味が広がる。名詞義は、人が人・物を「必要とする」特性（必要性）を引き継ぎ、これを節点に、とくに衣食住などの点で「必要とする状態」（（生活の）助けが必要な状況）と、必要性の対象である「必要なもの」、「必要とする」気持ちを生み出す原因にあたる「欲求」に展開する。

need

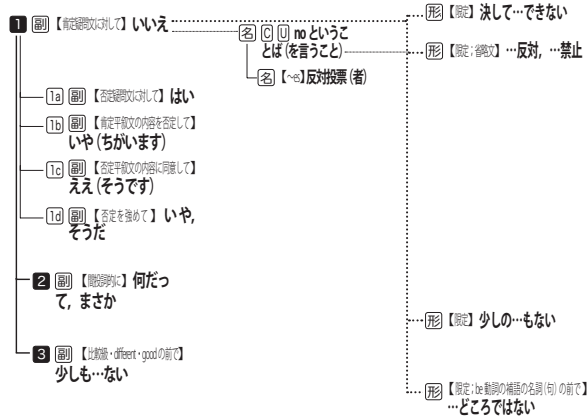


3.20. no

全体的に「否定する」特性が通底する。命題を否定する「いいえ」（語義 ①）は、特定の文脈での否定の意に限定されてさらに広がる。通常の想定を否定して、間投詞的に「何だって、まさか」と驚き・疑いなどを表す（語義 ②）。比較した程度差を否定すれば「少しも…ない」（語義 ③）。名詞義は、否定する「no ということば（を言うこと）」。

形容詞義は品詞内でどの語義からどの語義への拡張と言うよりも、何を否定するかによって4つに枝分かれしていると考えられる。可能性を否定して「決して…できない」、行為（の許可）を否定して「…反対、…禁止」、数量・程度を否定して「少しの…もない」、むしろその逆だと否定して「…どころではない」。

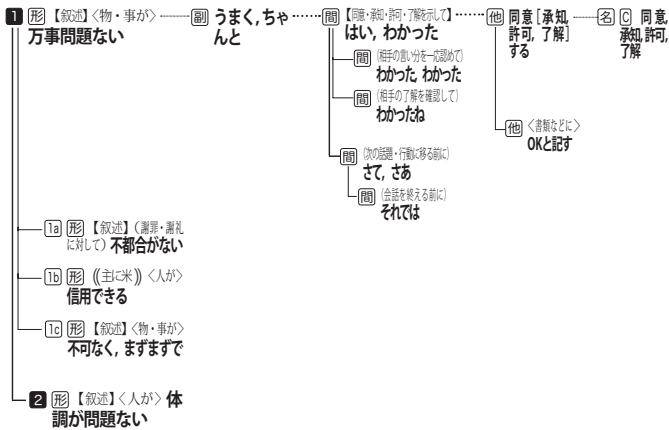
no



3.21. ok(ay)

多義構造の柱は形容詞義で、あらゆることにおいて「問題ない」を要に、その特性を引き継いで異なる概念領域での意味を担う。副詞義は、文法的な振る舞いが異なるだけで、意味的には中心義の「万事問題ない」と同じ。間投詞はいずれも当該行為を行うことが「問題ない」ことを表明する役目を果たす。動詞義は同意〔承知, 許可, 了承〕する行為を、名詞義はその行為を行うことを意味する。

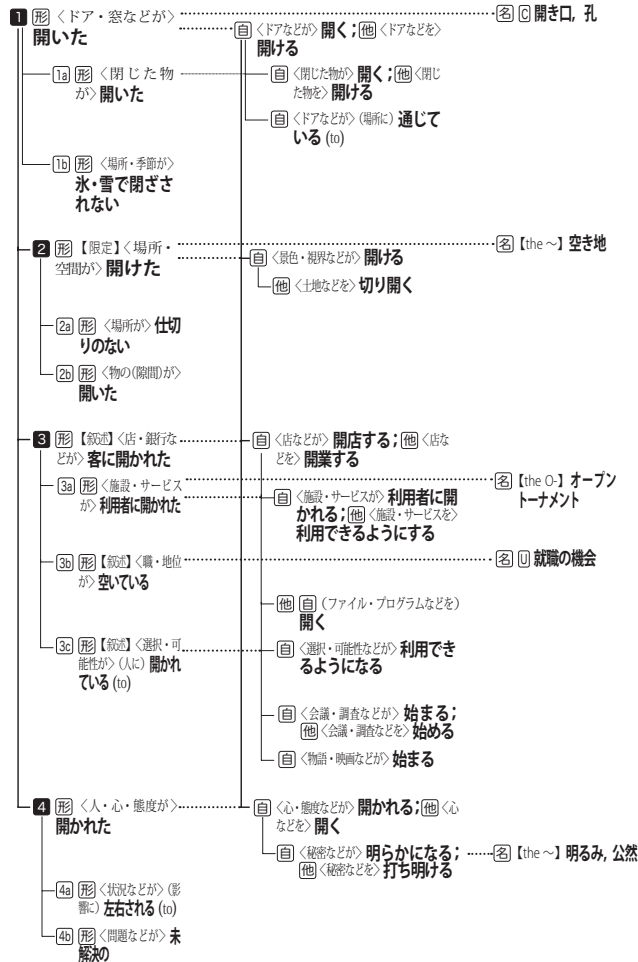
ok(ay)



3.22. open

多義構造の要は形容詞義で、ドア・窓などが「開いた」(語義 ①)。この特性の類似性に基づいて、場所・空間が「開けた」(語義 ②)、店・銀行などが「客に開かれた」(語義 ③)、心・態度などが「開かれた」(語義 ④)に展開する。動詞義は基本的に、これらのそれぞれの状態が生じる[を生み出す]プロセスの意味を担う。名詞義は、筆頭品詞の形容詞義か第2品詞の動詞義の特定の語義と局所的に関連するのみ。

open

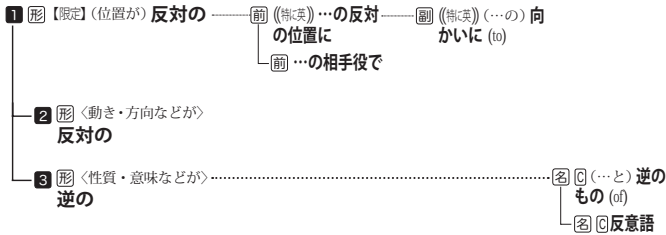


3.23. opposite

多義構造の軸は形容詞義。空間的な位置関係が「反対の」(語義 **1**) から、動き・方向など、性質・意味などに関して「反対の」(それぞれ語義 **2** **3**) に展開する。前置詞義・副詞義はともに位置の意味の

み対応する。名詞義は、性質・意味などの点で「反対のもの」を意味する。

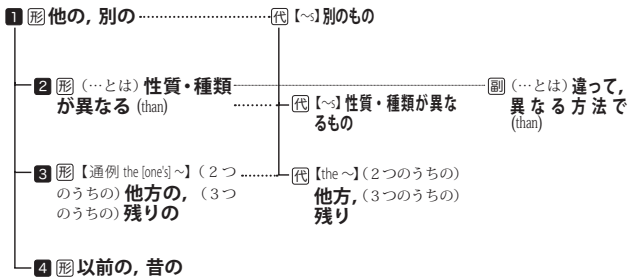
opposite



3.24. other

形容詞義と代名詞義が other の多義構造の骨格をなす。中心義「他の、別の」から特性の類似性に基づき、性質・種類が「他の」(異なる) (語義 2), 2つあるいは3つのうちの「他の」(他方の, 残りの) (語義 3) に意味が広がる。代名詞義はいずれもそれぞれの特性をもつものの意。形容詞義はさらに時間に関する意味 (語義 4) も担う。副詞義は局所的に「異なる」の意味を引き継ぐのみ。

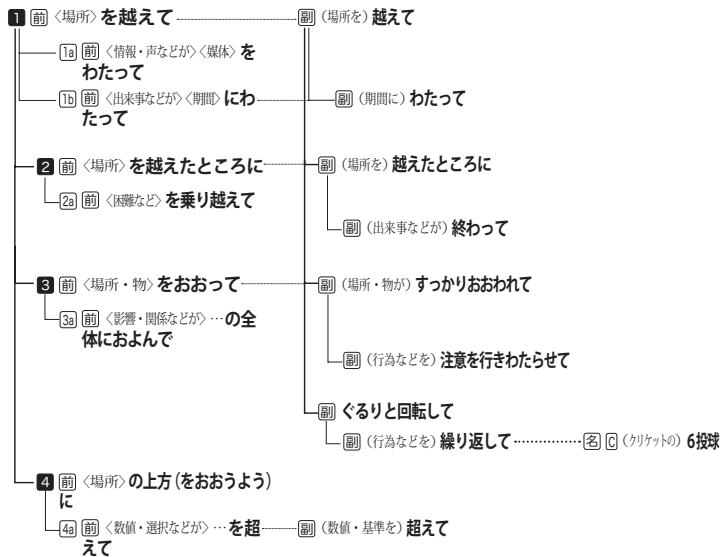
other



3.25. over

over は「…を越えて」（語義 ①）というプロセス的な意味を要に、その結果的な位置である「…を越えたところに」（語義 ②），越える動きの軌跡との類似性に基づいて「…をおおって」（語義 ③），越える際の部分的な位置関係から「…の上方に」（語義 ④）に意味が広がる。いずれも、空間的な意味からさらに抽象義に展開する。副詞義は、前置詞義の ①, ②, ③ を引き継ぐほか、越える動きを繰り返す「ぐるりと回転して」にも意味が広がる。いずれの具象義もさらに抽象義に展開する。前置詞義 ④ に対応する副詞義はなく、展開した抽象義（語義 ④a）に対応する数値・基準を「超えて」は、副詞義内での認知的関連性が途切れる。名詞義は、クリケットの投球の1セットである「6回ボールを投げること」。繰り返して行う行為の特定種にあたる。

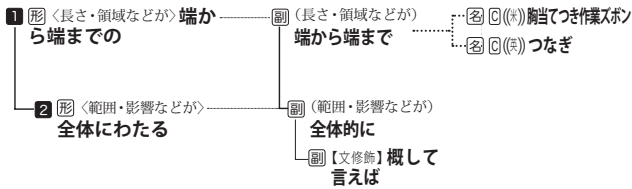
over



3.26. overall

空間的な「端から端までの」から、範囲・影響などの抽象概念に関して「全体にわたる」に意味が広がる。副詞義は、この展開と平行する。名詞義は局所的で、端から端までつながった物として、米・英でそれぞれ異なる物を指し示す。

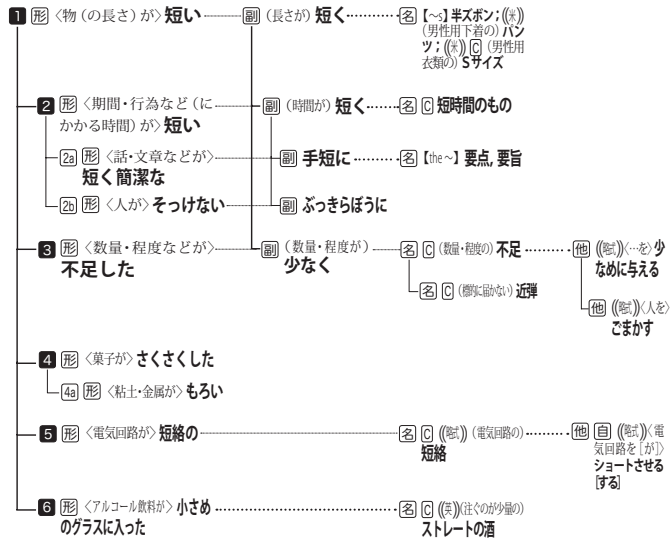
overall



3.27. short

語義展開の中核は、物理的な長さが「短い」(語義 **1**) と、その特性をそれぞれ時間と数量・程度に投射した意味合い (それぞれ語義 **2 3**)。形容詞義と副詞義とで語義展開が平行する。形容詞義は、特性の類似性に基づいて、さらに狭い特定の意味領域での意味を担う (語義 **4 5 6**)。名詞義は、互いに認知的関連性を有するのではなく、ほとんどが特定の形容詞・副詞義と局所的な対応・関連をもつのみ。動詞義は、さらにつながりが限定される。

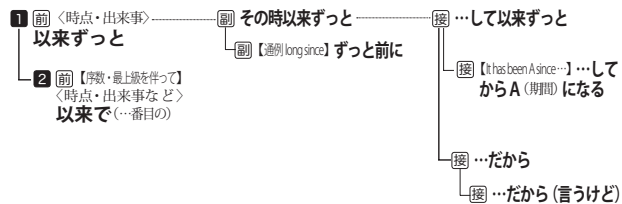
short



3.28. since

時間の「以来ずっと」の意味合いが前置詞，副詞，接続詞を横断する。接続詞義は，時間的な関係から因果関係に展開を見せる。

since

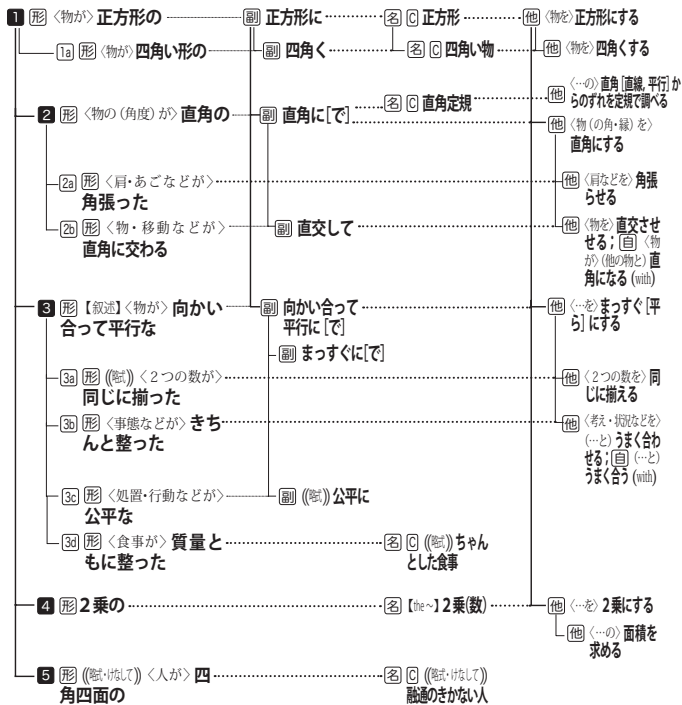


3.29. square

中心義は，形容詞義「正方形の」。正方形がもつ特性のひとつである「直角の」（語義 2）と「向かい合って平行な」（語義 3）に広がる

る。いずれもさらに豊かに意味が展開する。「2乗の」(語義 4)も正方形がもつ同じ2辺の長さ(の掛け算)と関連する。人の性格を正方形に見立てて「四角四面の」(語義 5)。形容詞義の多くは、その特性を生み出すプロセスを表す動詞義に関連する。副詞義は、形状(1系), 直角(2系), 平行(3系)を中心に意味が対応する。名詞義は、基本的に特定の語義と局所的に関連するのみ。

square

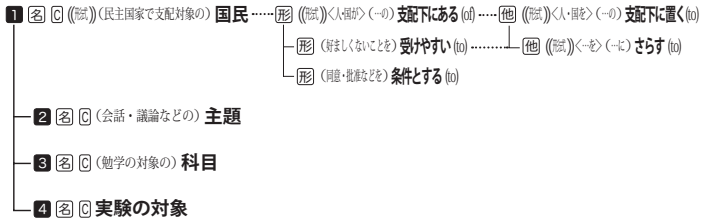


3.30. subject

中心義は名詞義「国民」。品詞横断的には、国民がもつ特性である「支配下にある」という形容詞義から、さらにその状態を生み出すプロセス「支配下に置く」という動詞義に展開する。形容詞・動詞義と

もに各品詞内で影響を及ぼす作用面に着目した見立てに基づき、さらに展開を見せる。他方、名詞義も、「国民」（民主国家が支配する対象）の何がどうする対象かという関係（特性）を異なる概念領域に投射して、「主題」（人が会話・議論を行う対象）、「科目」（人が勉学を行う対象）、「実験の対象」に拡張する。

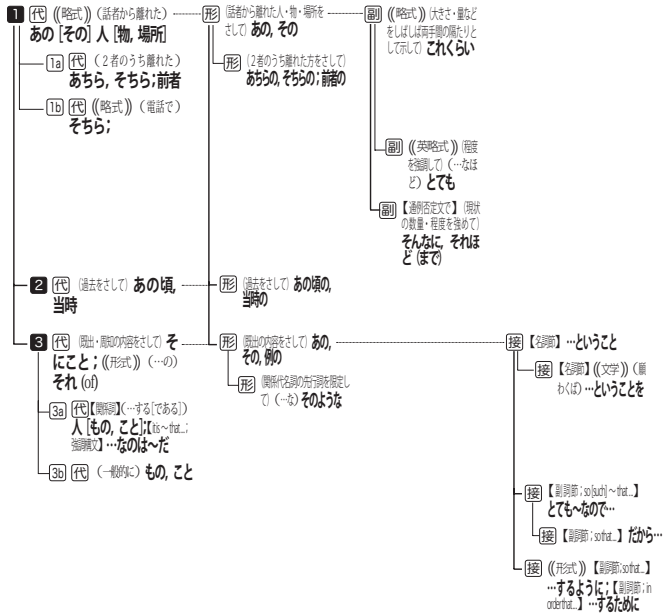
subject



3.31. that

代名詞と形容詞の語義はほぼ平行して展開する。空間的に話者から離れた対象をさす意味（**1**系）を起点に、時間的に離れた過去、内容的に離れたものをさす意味（それぞれ**2****3**系）に広がる。副詞義は、しばしば両手を大きく離すジェスチャーと連動して「これくらい」と大きさ・量などを示す意味から、程度などの意味にいたる。接続詞義は、内容の意味（**3**系）と対応し、文法的に名詞・副詞節を導く。

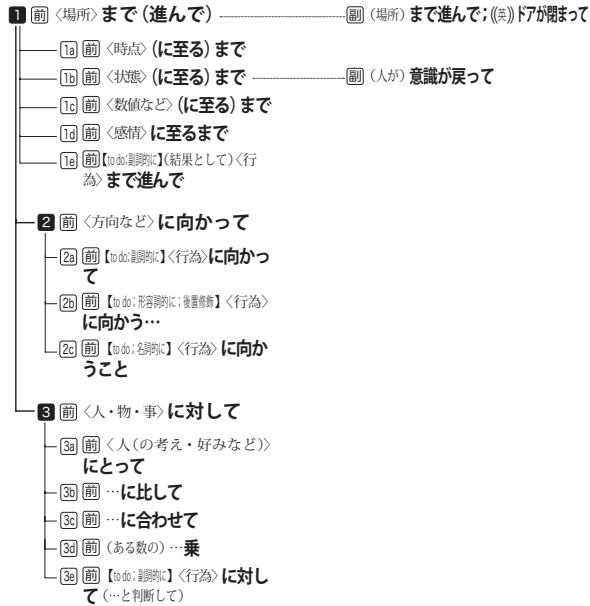
that



3.32. to

前置詞義が多義構造の中核かつほぼすべてで、副詞義は特定の語義と極めて局所的に対応するのみである。語義展開の核となるのは、到達点までの移動（語義**1**）とその方向（語義**2**）、行為などが向かう対象（語義**3**）の3つ。いずれもさらに豊かに意味が拡張する。to do の形式（いわゆる不定詞）も意味的なつながりの中でこの多義構造の中に位置づけることが可能である¹⁷。

to

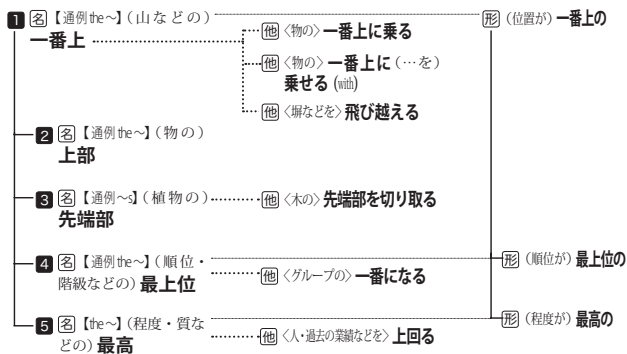


¹⁷ ただし、意味的な関連性を最優先すると、形式や用法ではまとめられず、分散して配置せざるをえない。理念の相違による致し方ない点であるが、辞書ユーザの利便性を考えると、いずれにも配慮した折衷案の模索は必要かもしれない。PG5 は、意味のつながりとまとまりを重視するものの、to に関しては一般向けの辞書記述との折り合いをつけるため、形式と用法でまとめて不定詞を語義3(系)とし、3名詞的用法、3a形容詞的用法、3b副詞的用法、3c間投詞的用法と記述する。ODE² は、core sense と subsense 間のつながりは重視するが、異なる品詞間の語義同士は言うにおよばず、同一品詞内の core sense 間のつながりにさえも言及しない姿勢を貫くので、さらに語義分けは機械的で、infinitive marker の下に 1 to do の形式のもの と 2 do が省略された to だけの形式のもの の2つを core sense として立て、前者を用法・内容により8つの subsense に分割する(ので、本来は 1, 2 とともに sense であるはずが、1 は to do の形式であること、2 は動詞が自明なために省略されて to のみであることしか記述されない)。

3.33. top

名詞義が、top の多義構造の中軸をなす。山などの「一番上」（語義 ①）を起点に、特性の類似性に基づく見立てにより、物の「上部」（語義 ②）、植物の「先端部」（語義 ③）、順位・階級の「最上位」（語義 ④）、程度・質などの「一番上」（最高）（語義 ⑤）に意味が広がる。形容詞義は、対応する3つの語義（① ④ ⑤ 系）が同じ認知的関連性を維持するが、動詞義はいずれも特定の名詞義とそれぞれ異なるメトニミー関係にある。

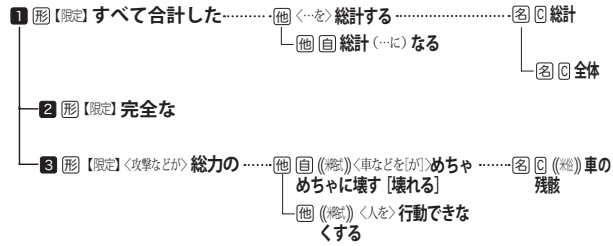
top



3.34. total

数に関する意味が品詞を横断して多義構造の中心を占める。「すべてを合計した」状態を生み出すプロセスが動詞義「総計する」、その結果が名詞義「総計」という関係。形容詞義は、特性の類似性に基づいて、「完全な」「総力の」に広がる。「総力の」からは局所的に口語的な動詞・名詞義が派生する。

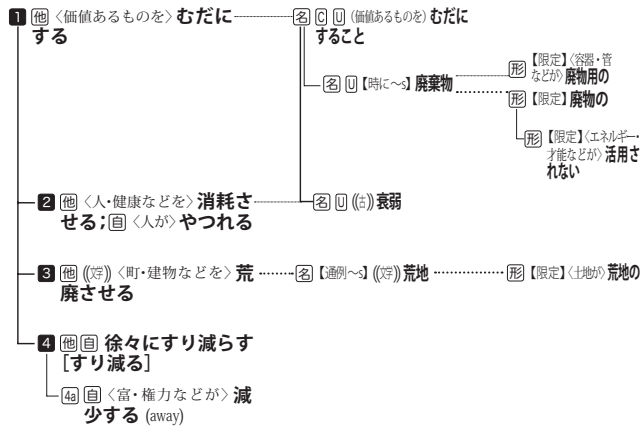
total



3.35. waste

多義構造の中軸は動詞義。「むだにする」を起点に、その見立てとして「消耗させる」「荒廃させる」「徐々にすり減らす」に意味が広がる。名詞義は、「むだにする」コト的な意味から、そのプロセスの結果にあたる「廃棄物」と、人・健康などを「消耗させること」(衰弱)に展開する。「荒地」は「荒廃させる」プロセスの結果できあがる物という認知的関係にあり、他の名詞義と直接認知的なつながりはない。形容詞義は、特定の名詞義と局所的に対応・関連する。

waste



3.36. welcome

人を「歓迎する」意が品詞を横断して多義を結びつける。名詞義は「歓迎する」コト的な意味。間投詞は「歓迎する」ときにかけることば。形容詞義「歓迎されている」は「歓迎する」行為を受けた結果の状態。他の語義は、その品詞内で認知的関連に基づき拡張する。

welcome

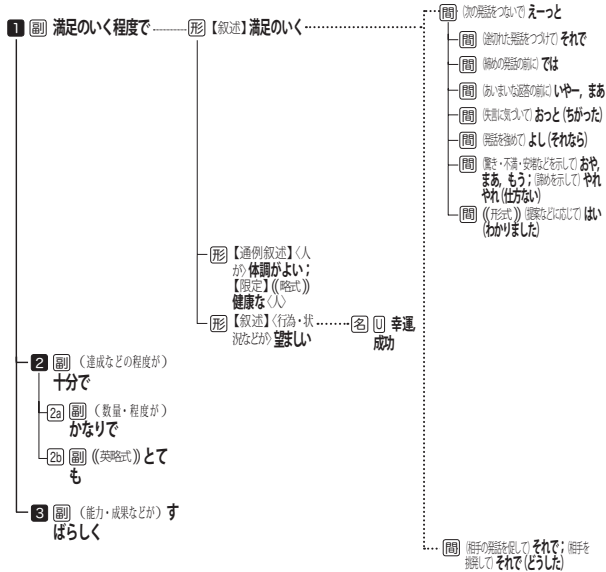


3.37. well

全体的に「満たして埋める」特性が通底する。心を満たした状態が「満足のいく程度で」(語義 1)。達成などの程度を満たして「十分に」(語義 2)。能力・成果などが期待や想定を満たせば「すばらしく」(語義 3)。形容詞義は「満足のいく」特性を引き継ぎ、さらに特定の満足のいく状態に意味が広がる。名詞義はそのうち、行為・状況などが「望ましい」から「望ましい状況」(幸運, 成功)に展開する¹⁸。間投詞は、さまざまな場面で発話の隙間を満たしてつなぐ働きを担う。後続する自分の発話を満たして埋めるケースと、相手の発話を誘導することで互いの発話からなる会話を満たして埋めるケースがある。前者はさらにいくつかの特定の用途に特殊化する。

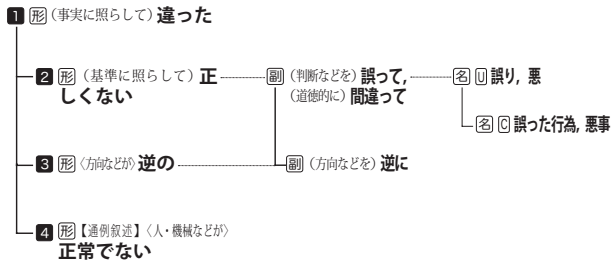
¹⁸ 名詞タグ (NN1 (普通名詞・単数形), NN2 (普通名詞・複数形)) のついで well は BNC 中1462例あるが、この名詞義での wellは、wish ... well か wish well (to ...) の形で130例収録されるのみ。

well



3.38. wrong

多義構造の軸をなすのは形容詞義。事実には「違った」という特性に基づき、基準に照らして「違った」(正しくない)、方向が「違った」(逆の)、人・機械などの調子が「違った」(正常でない)に広がる。副詞義は、基準(2系)と方向(3系)の意味を引き継ぐ。名詞義は基準(2系)の意味合いでのみつながりをもつ。

wrong

4. おわりに

宮畑 (2015) で提案した多品詞にわたる多義語の多義構造を記述するための試案に基づき、宮畑 (2016) では動詞と名詞の2品詞ともに高頻度で用いられる26項目、本稿では高頻度の品詞が5～3におよぶ44項目 (一部重複あり) の多義構造の記述を実践し、記述法の検証を行った。

概して使用頻度の高い品詞は多義の数も多い傾向にあり、その意味では、これらの作業を通して、最多クラスの品詞・多義数をもつ英語多義語はいずれもこの枠組みに基づいて多義構造が記述可能であることが実証できたと言える。また、多品詞にわたる多義の関連性に関して、とくに特徴的に

- (i) 各品詞間で認知的な語義展開が (概ね) 平行するもの [calm, inside, level, near, outsideなど]
- (ii) 特定の品詞に認知的な語義展開が大きく偏るもの [as, fair, for, toなど]
- (iii) 特定の品詞で独自の認知的な展開が豊かなもの [before, close, double, fit, roundなど]
- (iv) ある品詞の語義が (その品詞内で互いに認知的関連性があるのではなく) 別の品詞の語義と局所的に認知的関連性が見られるもの [back, head, topなど]

のいずれのケースもその多義構造を適正に提示できることも確認できた。実際には、とりわけ (ii) (iii) (iv) の現象は、たいていの項目で多かれ少なかれ同時に混在して観察されることが多く、高頻度で用いられる複数品詞にわたる多義語の多様な多義構造の記述の実践を踏まえて判断すると、この記述法の実効性はさまざまな事例において高いと言える。さらに、未記述の項目はこれらよりも品詞・多義数が少ないことを考えれば（実践した記述よりも多義構造が複雑になる可能性は極めて低いので）同じ枠組みで多義構造が適切に記述できる見通しはほぼ確実であると評価しうる。

この記述法に基づく多義構造の（紙面・画面上での）提示という観点から言えば、実践的記述を通して、品詞数をもっとも多いもの、語義数をもっとも多いものを想定した物理的に必要な最大スペースを推し測ることが可能になったと言える。本稿で提示した *back*, *like*, *open*, *round* が縦・横にスペースを要する最大クラスである。これらの大きさは、紙ベースで言えば通常の辞書サイズ（B6またはA5判）の1ページに、電子媒体ベースで言えば標準的なタブレット型端末の画面（8～12インチ）にスクロールなしで収まる程度のサイズである。それ以外の項目は、縦・横ともにこれらよりもスペースを取らない（と考えられる）ものばかりなので、これらに収録する上での問題はない。

もちろん、収録が可能だとは言っても、（通常の文字主体の記述に比べて）スペースを取ることは間違いないので、紙ベースだと必要な紙面は必然的に多くなる。また、多義の各語義の関連性ができるだけわかる（ことを意図した）代表的な語義（瀬戸（編）(2007)における「解説的意義」にあたる）だけでは、辞書として、その語義に相当する訳語（のバリエーション）や使用例などの情報が欠落する。これを考えると、この記述法での多義構造の提示は、紙媒体よりも、タブレット端末上での使用を念頭において考える方が実用性が高いように思われる。

デジタル化を想定するならば、さらに、紙媒体では実現できない動的な提示方法を採用することが可能になる。たとえば、*as* の意味の全体

像を提示するのに、段階を踏んで、最初は多義構造の出発点となる語義（中心義）のみを提示し（①）、次にそこから展開する筆頭品詞における主意義を展開し（②）、そして、それぞれの主意義から拡張する副意義を展開して（③）、そのあと第2品詞以降の語義を対応・関連する筆頭品詞の語義から順番に右に展開する、というシーケンスを縦方向から横方向に動的に見せるというのは、多義の広がりを目で追えるという意味で効果的である。

as

- ① 1 接（…と）同じ
程度に

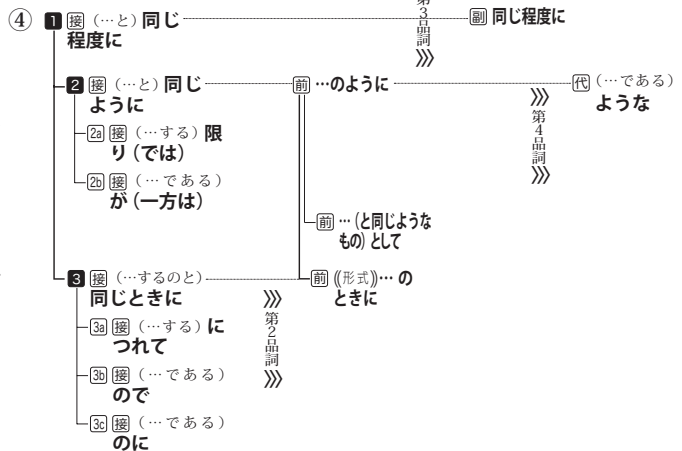
≡主意義を開く≡

- ② 1 接（…と）同じ
程度に
2 接（…と）同じ
ように
3 接（…するのと）
同じときに

≡副意義を開く≡

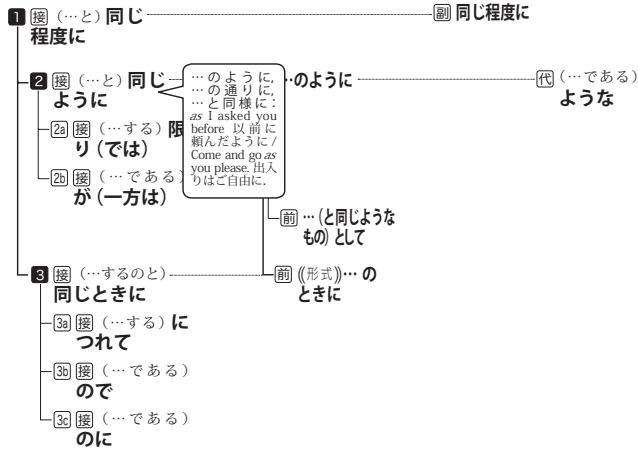
- ③ 1 接（…と）同じ
程度に
2 接（…と）同じ
ように
2a 接（…する）限
り（では）
2b 接（…である）
が（一方は）
3 接（…するのと）
同じときに
3a 接（…する）に
つれて
3b 接（…である）
ので
3c 接（…である）
のに

≫第2品詞以降を開く≫



各語義の訳語候補や用例の表示に関しても、全多義構造を表示した状態で、当該語義を選択すると、下図のように、その情報がポップアップ式の表示エリア（サイズは内容に応じて可変）に出るように用意すれば、利用者は、多義構造の中でのその語義の位置づけを念頭に置きながら、必要な追加情報を得ることが可能になる¹⁹。

as



実際面では、プログラム上の問題があり、実現可能かどうか、あるいはモデルと考える表示にどれくらい近づけることができるかはまだ未知数であるが、（とくに多品詞にわたる多義語の）多義構造を記述する方法としての妥当性が確認でき、その活用の可能性を検討できたという意味では、理想の辞書づくりに向けて一定の道標を示せたのではないと思われる。

参考文献

Kilgarriff, A. 1995. "BNC database and word frequency lists." (1996 updated; 1998 HTML ver.) <http://www.kilgarriff.co.uk/bnc->

¹⁹ この表示法だと、情報量の調整も高い自由度で可能である。

readme.html

宮畑一範. 2015. 「英語多品詞語の多義構造の一記述試案」『言語文化学研究 (言語情報編)』第10号, pp.23-41.

宮畑一範. 2016. 「高頻度の動・名/名・動 2 品詞多義語の多義構造の記述」『言語文化学研究 (言語情報編)』第11号, pp.19-49.

ODE³ : Oxford Dictionary of English (3rd edition). 2010. Oxford University Press.

PG5 : 『プログレッシブ英和中辞典 [第5版]』2012. 小学館.

瀬戸賢一 (編). 2007. 『英語多義ネットワーク辞典』小学館.

(大阪府立大学准教授)